

山水経

Voici pour ceux que ça intéresserait, une version du texte japonais du *Sansuikyô* qui est le 29^{ème} texte de l'Ancienne édition du *Shôbôgenzô* de maître Dôgen. Il contient de nombreux caractères anciens (certains existent aussi dans une autre graphie).

Les numéros correspondent, sauf erreur possible, aux paragraphes de la traduction de Yoko Orimo dans le tome 1 de l'édition intégrale (éd Sully). Mais il peut y avoir quelques erreurs.

Le texte est divisé en quatre parties en plus de l'introduction et de la finale.

Christiane Marmèche

INTRODUCTION

而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功德を成ぜり。空劫已前の消息なるがゆゑに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆゑに、現成の透脱なり。山の諸功德高広なるをもて、乗雲の道德かならず山より通達す、順風の妙功さだめて山より透脱するなり。

PREMIERE PARTIE

- 1.大陽山階和尚示衆に云く、青山常運歩《青山常に運歩し》、石女夜生児《石女夜児を生む》。
- 2.山はそなはるべき功德の虧闕することなし。このゆゑに常安住なり、常運歩なり。その運歩の功德、まさに審細に参学すべし。山の運歩は人の運歩のごとくなるべきがゆゑに、人間の行歩におなじくみえざればとて、山の運歩をうたがふことなかれ。いま仏祖の説道、すでに運歩を指示す、これその得本なり。常運歩の示衆を究辨すべし。
- 3.運歩のゆゑに常なり。青山の運歩は其疾如風よりもすみやかなれども、山中人は不覚不知なり、山中とは世界裏の花開なり。山外人は不覚不知なり、山をみる眼目あらざる人は、不覚不知、不見不聞、這箇道理なり。
- 4.もし山の運歩を疑著するは、自己の運歩をもいまだしらざるなり。自己の運歩なきにはあらず、自己の運歩いまだしられざるなり、あきらめざるなり。自己の運歩をしらんがごとき、まさに青山の運歩をもしるべきなり。青山すでに有情にあらず、非情にあらず。自己すでに有情にあらず、非情にあらず。いま青山の進歩を疑著せんこと、うべからず。いく法界を量局として、青山を照鑑すべしとしらず。青山の運歩および自己の運歩、あきらかに検点すべきなり。退歩歩退、ともに検点あるべし。未朕兆の正当時、および空王那畔より、進歩退歩に運歩しばらくもやまざること、検点すべし。

5. 運歩もし休することあらば、仏祖不出現なり。運歩もし窮極あらば、仏法不到今日ならん。進歩いまだやまず、退歩いまだやまず。進歩のとき、退歩に乖向せず。退歩のとき進歩を乖向せず。この功德を山流とし、流山とす。青山も運歩を参究し、東山も水上行を参学するがゆへに、この参学は山の参学なり。山の身心をあらためず、やまの面目ながら廻途参学しきたれり。青山は運歩不得なり、東山水上行不得なると、山を誹謗することなかれ。低下の見処のいやしきゆゑに、青山運歩の句をあやしむなり。少聞のつたなきによりて、流山の語をおどろくなり。いま流水の言も七通八達せずといへども、小見小聞に沈溺せるのみなり。

6. しかあれば、所積の功德を挙せるを形名とし、命脈とせり。運歩あり、流行あり。山の山児を生ずる時節あり、山の仏祖となる道理によりて、仏祖かくのごとく出現せるなり。たとひ草木土石牆壁の見成する眼晴あらんときも、疑著にあらず、動著にあらず、全現成にあらず。たとひ七宝莊嚴なりと、見取せらるる時節現成すとも、実帰にあらず。たとひ諸仏行道の境界と見現成あるも、あながちの愛処にあらず。たとひ諸仏不思議の功德と見現成の頂額をうとも、如実これのみにあらず。

7. 各々の見成は各々の依正なり、これらを仏祖の道業とするにあらず、一偶の管見なり。転境転心は大聖の所呵なり、説心説性は仏祖の所不肯なり。見心見性は外道の活計なり。滞言滞句は解脱の道著にあらず。かくのごとくの境界を透脱せるあり、いはゆる青山常運歩なり、東山水上行なり。審細に参究すべし。

8. 石如夜生児は、石女の生児するときに夜といふ。おほよそ男石女石あり、非男女石あり。これよくて天を補し、地を補す。天石あり、地石あり。俗のいふところなりといへども、人のしるところまれなるなり。生児の道理しるべし。生児のとき親子並化するか。児の親となるを生児現成と参学するのみならんや、親の児となるときを、生児現成の修証なりと参学すべし、究徹すべし。

DEUXIÈME PARTIE

1. 雲門匡真大師いはく、東山水上行。この道現成の宗旨は、諸山は東山なり、一切の東山は水上行なり。このゆゑに、九山迷廬等現成せり、修証せり。これを東山といふ。しかあれども、雲門いかでか東山の皮肉骨髓、修証活計に透脱ならん。

2. いま現在大宋国に、杜撰のやから一類あり、いまは群をなせり。小実の撃不能なるところなり。かれらいはく、いまの東山水上行話、および南泉の鎌子話ごときは、無理会話なり。その意旨は、もろもろの念慮にかかはれる語話は、仏祖の禅話にあらず。無理会話、これ仏祖の語話なり。かるがゆゑに、黄檗の行棒(きようぼう)および臨済の挙喝、これら理會およびがたく、念慮にかかはれず、これを朕兆未萌以前の大悟とするなり。先徳の方便、おほく葛藤断句をもちゐるといふは、無理会なり。

3.かくのごとくいふやから、かつていまだ正師をみず、参学眼なし。いふにたらざる小獣子なり。宋土ちかく二百年よりこのかた、かくのごとくの魔子・六群・禿子おほし。あはれむべし、仏祖の大道の廢するなり。これらが所解、なほ小乗声聞におよばず、外道よりもおろかなり。俗にあらず僧にあらず、人にあらず天にあらず、学仏道の畜生よりもおろかなり。禿子がいふ無理会話、なんぢのみ無理会なり、仏祖はしかあらず。なんぢに理会せられざればとて、仏祖の理会路を参学せざるべからず。たとひ畢竟じて無理会なるべくは、なんぢがいまいふ理会もあたるべからず。

4.しかのごとときのたぐひ、宋朝の諸方におほし。まのあたり見聞せしところなり。あはれむべし、かれら念慮の語句なることをしらず、語句の念慮を透脱することをしらず。在宋のとき、かれらをわらふに、かれら所陳なし、無語なりしのみなり。かれらがいまの無理会の邪計(じやけ)なるのみなり。たれかなんぢにをしふる、天真の師範なしといへども、自然の外道児なり。

5.しるべし、この東山水上行は仏祖の骨髓なり。諸水は東山の脚下に現成せり。このゆゑに、諸山くもにのり、天をあゆむ。諸水の頂額は諸山なり。向上直下の行歩、ともに水上なり。諸山の脚尖よく諸水を行歩し、諸水を趨出せしむるゆゑに、運歩七縦八横なり、修証即不無なり。

TROISIEME PARTIE

1.水は強弱にあらず、湿乾にあらず、動静にあらず。冷煖にあらず、有無にあらず、迷悟にあらざるなり。こりては金剛よりもかたし、たれかこれをやぶらん。融じては乳水よりもやはらかなり、たれかこれをやぶらん。しかあればすなはち、現成所有の功德をあやしむことあたはず。しばらく十方の水を十方にして著眼看すべき時節を参学すべし。人天の水をみるときのみ参学にあらず、水の水をみる参学あり、水の水を修証するゆゑに。水の水を道著する参究あり、自己の自己に相逢する通路を現成せしむべし。他己の他己を参徹する活路を進退すべし、跳出すべし。。

2.おほよそ山水をみること、種類にしたがひて不同あり。いはゆる水をみるに瓔珞とみるものあり。しかあれども瓔珞を水とみるにはあらず、われらがなにとみるかたちを、かれが水とすらん。からが瓔珞は、われ水とみる。水を妙華とみるあり。しかあれど、華を水ともちるにあらず。鬼は水をもて猛火とみる、膿血とみる。龍魚は宮殿とみる、楼台とみる。あるいは七宝摩尼珠とみる、あるいは樹林牆壁とみる、あるいは清流解脱の法性とみる。あるいは真実人体とみる。あるいは身相心性とみる。人間これを水とみる、殺活の因縁なり。

3.すでに随類の所見不同なり、しばらくこれを疑著すべし。一境をみるに所見、しなじななりとやせん、諸象を一境なり誤錯せりとやせん、功夫の頂額功

夫すべし。しかあればすなはち、修証辨道も一般兩般なるべからず、究竟の境界も千種万般なるべきなり。

4.さらにこの宗旨を憶想するに、諸類の水たとひおほしといへども、本水なきがごとし。諸類の水なきがごとし。しかあれども、随類の諸水、それ心によらず身によらず、業より生ぜず、依自にあらず依他にあらず、依水の透脱あり。しかあれば、水は地水火風空識等にあらず、水は青黄赤白黒等にあらず、色声香味触法等にあらざれども、地水火風空等の水、おのづから現成せり。かくのごとくなれば、而今の国土宮殿、なにもものの能成所成と、あきらめいはんことかたかるべし。空輪・風輪にかかされると道著する、わがまことにあらず、他のまことにあらず。小身の測度を擬議するなり。かかれるところなくば、住すべからずとおもふによりて、この道著するなり。

5.仏言はく、一切諸法畢竟解脱、無有所住《一切諸法は畢竟解脱なり、所住有ること無し》。

6.しるべし、解脱にして繫縛なしといへども諸法住位せり。しかあるに、人間のみずをみるに、流注してとどまらざるとみる一途あり。その流に多般あり、これ人見の一端なり。いはゆる地を流通し、空を流通し、上方に流通し、下方に流通す。一曲もながれ、九淵にもながる。のぼりて雲をなし、くだりてふちをなす。

7.文子に曰く、水之道、上天為雨露、下地為江河《水の道、天に上りては雨露を為す、地に下りては江河を為す》。

8.いま俗のいふところ、なほかくのごとし。仏祖の児孫と称せんともがら、俗よりもくらはらんは、もともはずべし。いはく、水の道は、水の所知覚にあらざれども、水よく現行す。水の不知覚にあらざれども、水よく現行するなり。

9.上天雨露といふ。しるべし、水はいくそばくの上天上方へものぼりて雨露をなすなり。雨露は世界にしたがうて、しなじななり。水のいたらざるところあるといふは、小乗声聞教なり、あるいは外道の邪教なり。水は火焰裏にもいたるなり、心念思量分別裏にもいたるなり、覚智仏性裏にもいたるなり。

10.下地為江河。しるべし、水の下地するとき、江河をなすなり。江河の精、よく賢人となる。いま凡愚庸流のおもはくは、水はかならず江河海川にあるとおもへり。しかにはあらず、水のなかに江海をなせり。しかあれば、江海ならぬところにも水はあり、水の下地するとき、江海の功をなすのみなり。また、水の江海をなしつるところなれば、世界あるべからず、仏土あるべからずと学すべからず。一滴のなかにも無量の仏国土現成なり。しかあれば、仏土のなかにみずあるにあらず、水裏に仏土あるにあらず。水の所在、すでに三際にかかはれず、法界にかかはれず。しかも、かくのごとくなりといへども、水現成の公案なり。

11. 仏祖のいたるところには水かならずいたる。水のいたるところ、仏祖かならず現成するなり。これによりて、仏祖かならず水を捻じて身心とし、思量とせり。しかあればすなはち、水はかみにのぼらずといふは、内外の典籍にあらず。水之道は上下縦横に通達するなり。

12. しかあるに、仏教のなかに、火風は上にのぼり、地水は下にくだる。この上下は、参学するところあり。いはゆる、仏道の上下を参学するなり。いはゆる、地水のゆくところを下とするなり。下を地水のゆくところとするにあらず。火風のゆくところは上なり。法界かならずしも上下四維の量にかかはるべからざれども、四大・五大・六大等の行処によりて、しばらく法隅法界を建立するのみなり。無想天はかみ、阿鼻獄はしもとせるにあらず。阿鼻も尽法界なり、無想も尽法界なり。

13. しかあるに、龍魚の水を宮殿とみるとき、人の宮殿をみるがごとくなるべし、さらにながれゆくとき知見すべからず。もし傍観ありて、なんぢが宮殿は流水なりと為説せんときは、われらがいま、山流の道著を聞著するがごとく、龍魚たちまち驚疑すべきなり。さらに宮殿楼閣の欄塔露柱は、かくのごとくの説著あると保任することもあらん。しづかにおもひきたり、おもひもてゆくべし。この辺表に透脱を学せざれば、凡夫の身心を解脱せるにあらず、仏祖の国土を究尽せるにあらず。凡夫の国土を究尽せるにあらず、凡夫の宮殿を究尽せるにあらず。

14. いま人間には、海のころ、江のころを、ふかく水と知見せりといへども、龍魚等、いかなるものをもて水と知見し、水と使用すといまだしらず。おろかにわが水と知見するを、いづれのたぐひも水にもちあるらんと認ずることなかれ。いま学仏のともがら、水をならはんとし、ひとすじに人間のみにとどこほるべからず。すすみて仏道のみづを参学すべし。仏祖のもちあるところの水は、われらこれをなにとか所見すると参学すべきなり。仏祖の屋裏、また水ありや水なしやと参学すべきなり。

QUATRIEME PARTIE.

1. 山は超古超今より大聖の所居なり。賢人聖人、ともに山を堂奥とせり、山を身心とせり。賢人聖人によりて、山は現成せるなり。おほよそ山は、いくそばくの大聖大賢いりあつまれるらんとおぼゆれども、山はいりぬるよりこのかたは、一人にあふ一人もなきなり。ただ山の活計の現成するのみなり、さらにいきたりつる蹤跡なほのこらず。

2. 世間にて山をのぞむ時節と、山中にて山にあふ時節と、頂額眼睛はるかにことなり。不流の憶想および不流の知見も、龍魚の知見と一斉なるべからず。人天の自界にところをうる、他類これを疑著し、あるいは疑著におよばず。しかあれば、山流の句を仏祖に学すべし、驚疑にまかすべからず。拈一はこれ流な

り、拈一これ不流なり。一回は流なり、一回は不流なり。この参究なきがごときは、如来正法輪にあらず。

3.古仏いはく、欲得不招無間業、莫謗如来正法輪《無間の業を招かざることを得んと欲(おも)はば、如来正法輪を謗(な)すること莫(なか)れ》。

4.この道を、皮肉骨髓に銘ずべし、身心依正に銘ずべし。空に銘ずべし、色に銘ずべし、若樹若石に銘ぜり、若田若里に銘ぜり。

5.おほよそ山は国界に属せりといへども、山を愛する人に属するなり。山かならず主を愛するとき、聖賢高德やまに在るなり。聖賢やまにすむとき、やまこれに属するがゆゑに、樹石鬱茂(じゅせきうつも)なり、禽獸靈秀(きんじゅうれいしゅう)なり。これ聖賢の徳をかうぶらしむるゆゑなり。しるべし、山は賢をこのむ実あり、聖をこのむ実あり。

6.帝者おほく山に幸して賢人を拝し、大聖を拝問するは、古今の勝躅なり。このとき、師礼をもてうやまふ、民間の法に準ずることなし。聖化のおよぶところ、またく山賢を強為することなし。山の人間をはなれたること、しりぬべし。崆峒華封のそのかみ、黄帝これを拝請するに、膝行して叩頭して広成にとふしなり。釈迦牟尼仏かつて父王の宮をいでて山へいれり。しかあれども、父王やまをうらみず、父王、やまにありて太子ををしふるともがらを、あやしまず。十二年の修道、おほく山にあり。法王の運啓も在山なり。まことに輪王なほ山を強為せず。しるべし、山は人間のさかひにあらず、上天のさかひにあらず、人慮の測度をもて山を知見すべからず。もし人間の流に比準せずば、たれか山流山不流等を疑著せむ。

FINALE.

1.あるいはむかしよりの賢人聖人、ままに水にすむもあり。水にすむとき、魚をつるあり、人をつるあり、道をつるあり。これともに古来水中の風流なり。さらにすすみて自己をつるあるべし、釣をつるあるべし、釣につらるるあるべし、道につらるるあるべし。

2.むかし徳誠和尚、たちまちに薬山をはなれて江心にすみし、すなはち、華亭江の賢聖をえたるなり。魚をつらざらんや、人をつらざらんや、水をつらざらんや、みづからをつらざらんや。人の徳誠をみることをうるは、徳誠なり。徳誠の人を接するは、人にあふなり。

3.世界に水ありといふのみにあらず、水界に世界あり。水中のかくのごとくなるのみにあらず、雲中にも有情世界あり、風中にも有情世界あり、火中にも有情世界あり、地中にも有情世界あり。法界中にも有情世界あり、一茎草中にも

有情世界あり、一柱杖中にも有情世界あり。有情世界あるがごときは、そのところ、かならず仏祖世界あり。かくのごとくの道理、よくよく参学すべし。

4.しかあれば、水はこれ真龍の宮なり、流落にあらず。流のみなりと認ずるは、流のことば、水を謗するなり。たとへば非流と強為するがゆゑに。水は水の如是実相のみなり、水是水功德なり、流にあらず。一水の流を参究し、不流を参究するに、万法の究尽たちまちに現成するなり。

5.山も室にかくるる山あり、沢にかくるる山あり、空にかくるる山あり、山にかくるるやまあり。 蔵に蔵山する参学あり。

6.古仏云く、山是山、水是水。

7.この道取は、やまこれやまといふにあらず、山これやまといふなり。しかあれば、やまを参究すべし、山を参窮すれば山に功夫なり。かくのごとくの山水、おのづから賢をなし、聖をなすなり。

正法眼蔵山水経第二十九

爾時仁治元年庚子十月十八日于時在観音導利興聖宝林寺示衆